

教育活動の意義付けによる教師の学びを促進するための実践的研究

吉村 憲治*・山田 智之**・沼田 大輝***・豊田 隼***
加藤 賢***・福田 一仁***・岩井 隼人***・宮島 康則****

(令和3年8月31日受付；令和3年11月24日受理)

要 旨

本研究は、小学校における日々の教育実践をキャリア教育の視点から見取り、再評価・意義付けすることによって、教員の自己省察と学びを促進することを目的に行われた。学びを促進する手立てとして、教育実践の見取り、再評価・意義付けを整理した資料の発行、教員と協議する機会を定期的に開催し、教員の自己省察と学びの機会を意図的に設定した。このような取り組みの結果、教員は日常の教育実践の意義を再確認、再発見するとともに、自分の思いや考えを整理するなど、自己省察と学びを促進させたことが明らかになった。

KEY WORDS

Significance 意義付け, Self-reflection 自己省察, Career education キャリア教育

1 問題と目的

現在、教員の多忙化が叫ばれており、日本の小中学校教員の勤務時間の長さや人材不足感の高さが、国際比較においても指摘されている(文部科学省, 2018)。そのような現状の中で、学校教育への期待や要望は多岐にわたり、学校現場は新たな教育課題への対応や教育システムの改善に追われている。このような学校教育における課題を克服していく1つの視点として、カリキュラム・マネジメントがある。田村(2014)は、カリキュラム・マネジメントは可能な限り適切かつ効果的なカリキュラムを創造し、実施し、それらを発展的に更新していく営みであると指摘しており、猪熊(2007)はより良い学校づくりのためには、教員一人ひとりがカリキュラム・マネジメントに関する能力を身に付け、積極的に推し進めていく必要性を指摘している。また、田村(2017)はカリキュラム・マネジメントにおいてカリキュラムデザインの重要性を指摘し、学校の教育活動全体を視野に入れてカリキュラムを描き、各教科等で行われる1年間の学びを俯瞰し関連付けた上で、学びの文脈を大切にしながら単元計画を作成していくことが重要であると述べている。これらのことから、学校教育をより系統的かつ効率的に推進、充実させていくためには、各教育活動や取組を独立したものとして実行していくのではなく、教員個人がカリキュラム・マネジメントの視点を活かしながら各実践内容および取組の有機的なつながりを明確にし、教育活動全体を捉えて日々の実践を遂行していくことが重要であると考えられる。

他方で、学校教育の中核を担う教師の影響について、浜名・松本(1993)は教師行動の変化に伴う当該児童の学級適応の変化を検討し、受容的・共感的な態度に裏打ちされた特定の指導行動を意図的に増加させれば、当該児童の教師や級友との関係、学習への意欲などが肯定的な方向に変化することを明らかにしている。これは、学校において指導の中核を担い、身近な職業人として子供たちと多くの時間を共有する教師の意識の在り方が子供たちに影響を与えることを示しているものと考えられる。

以上のことから、よりよい学校づくり及び、子供たちに対する学校教育の効果を高めていく上で、学校教育を担う教師の能力向上は欠かすことができない。そうした教師の能力の向上について、田村(2014)は日々の授業の質を高め、カリキュラムを改善・発展させていくためにはカリキュラム・マネジメントサイクルのC(評価)、A(維持・改善)の重要性を指摘している。そして、Korthagen(2001 武田監訳 2010)は教師が成長し続ける力を身に付ける上で、その理想的プロセスとして行為(Action)、行為の振り返り(Looking back on the action)、本質的諸相への気づき(Awareness of essential aspects)、行為の選択肢の拡大(Creating alternative methods of action)、そして試行(Trial)の5つの局面からなるALACTモデルを提唱している。また、堀(2019)は学習者が自ら学び自ら考える力という高次学力獲得において自己評価を活用したメタ認知能力の育成の重要性を指摘している。これらのことか

ら、教師の能力向上を促すためには、教員個々人が自身の日々の教育活動や取組について適宜振り返り、それを評価、実行していく機会は欠かすことができない。それと同時に、教員個々人が各実践の意義やねらいを十分に理解し、学校教育全体のつながりをより明確に意識しながら日々の実践を推進していける素地を備えていくことが必要不可欠であるものと考えられる。

しかし、教育現場での新たな実践導入について永井・庄司・望月・加藤（2007）は、学校現場の教師の特徴として、学校にとって身近な存在の考えを信頼する傾向があることを明らかにしており、研究者が学校現場と関わる際には、実践知が構成される場に密着し、教師と共に研究を遂行する重要性を指摘している。また、Korthagen（2001 武田監訳 2010）は、教師教育において理論的な見識を身に付けさせていく上で、学問知よりも彼ら自身のニーズや関心、省察等と結びついた実践知を発達させることを目指すべきであると指摘している。つまり、教師の思いに寄り添いながら実践内容を共に創造していくことができる環境を整えていくことが重要であると考えられる。

近年、カリキュラム・マネジメントの中核をなすものとして、キャリア教育が注目を集めている。キャリア教育は、文部科学省（1999）においてその必要性が提唱されて以来、児童生徒の「社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」としてこれまで推進されてきた。そして、平成29年度告示の小・中学校の学習指導要領（文部科学省、2017）において初めて「キャリア教育」の文言が明記され、現在の教育現場ではキャリア教育のより一層の充実が求められている現状がある。

本研究は、キャリア教育を中核とするカリキュラム・マネジメントの推進を検討している2つの小学校と連携協力を図り、連携協力期間中の日々の教育実践を参与観察によってキャリア教育の視点から見取り、再評価・意義付けし当該校の教員に提供することで、どのような意識変容を教員にもたらすのかについて検討することを目的とする。

2 方法

2.1 連携協力校概要

連携協力校は北信越地域に位置するA小学校並びにB小学校である。A小学校は、各学年1学級の小規模の公立小学校であり、連携協力者となる教員は校長を含む15名であった。A小学校ではキャリア教育に焦点をあてたよりよい学校づくりを目標に掲げ、互いを認め合える居心地のよい学級づくりを目指して、日々創意工夫を凝らした様々な教育活動の実践にあたった。B小学校は複式学級を含む3学級の小規模の公立小学校であり、連携協力者となる教員は校長を含む7名であった。B小学校では地域教材を中核とした教科横断的な学習の充実を図るとともに、今年度から複式学級増に伴い新たなカリキュラムを創造しながら、系統的かつ効率的な教育活動の実践にあたった。

2.2 手立て

連携期間は2020年9月半ばから12月半ばまでの約3ヶ月間であった。具体的には、週3回、各5時間程度、当該校を調査者数名で訪問し、授業に参加しながら学習支援を行う中で参与観察を行った。また、学校行事等（学習発表会、校外学習）への参加や、校内授業研究会および研修会への参与観察も行った。その他、過去の資料や学校の活動計画等のデータ収集も行い、観察を補完するものとして用いた。それと同時に、主に以下の3つの手立てを講じることで、系統的・計画的に教師の学びの促進を図れるようにした。

2.2.1 連携だよりの発行

当該校の取組をキャリア教育的な視点から見取り、教員に提供していくことで、C（評価）、A（維持・改善）の機会の補償と実行、教員の学びを促進することをねらいとして「学校連携だより」を週1回程度、計21回発行した（A小学校11回、B小学校10回）。学校連携だよりは、大田区立矢口中学校（2019）での取り組みを参考に、横軸は学習指導要領に示された「生きる力の三つの柱（文部科学省、2017）」、縦軸は基礎的・汎用的能力（文部科学省、2011）に郷土愛が加わった「新潟っ子を育てる5つの視点（新潟県立教育センター、2011）」を採用しマトリックス表を作成した。そして、これを用いて日頃の指導・支援や子供たちの活動を見取り、分類・整理し、それらのつながりを図式化して、普段の実践の教育的意義をキャリア教育の視点から可視化し、活動の意義付けを行った（Figure 1）。つまり、学校連携だよりは参与観察によって得られた普段の実践内容（実践知）からの学びを、キャリア教育の視点からマトリックス表（学問知）に整理したものである。

また、学校連携だよりの作成に際しては、客観的、論理的な視点を補償するために、見取った内容をマトリックス表に整理・分類し、つながりを可視化していく際には、チームで協議する時間を設定し協議を重ねながら、最終的に

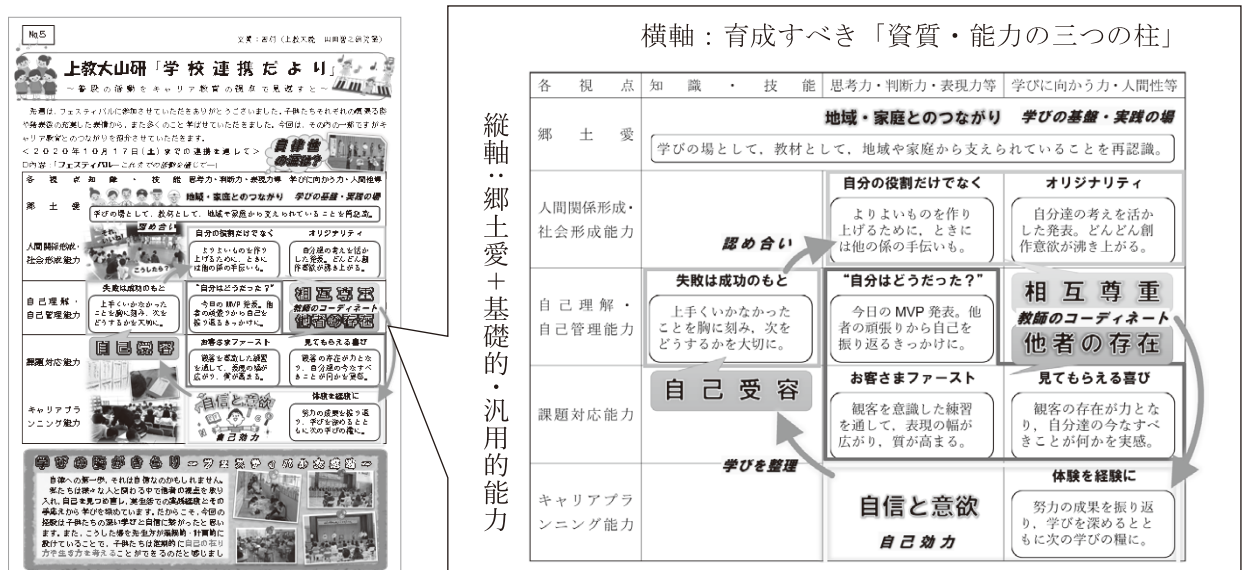


Figure 1 連携だよりおよびキャリアマトリックス表。

はキャリア教育学を専門とする大学教員を交えた協議および最終確認を行った上で各連携協力校に配布した。また、活動の意義を見出しやすくするために見取るテーマを設定し、連携だよりごとに見取る視点を統一した上で参与観察するとともに、その日の見取った内容をオンラインストレージ上に記録し共有することで、その日参与観察を行うことができなかつたメンバーがいつでも日々の実践内容を確認できるようにした。

2. 2. 2 連携協議会の実施

直接、当該校の教員と意見を交流する場として連携協議会を各校月1回程度、計4回ずつ実施した (Table 1)。定期的な情報共有および議論の時間を確保することで、連携内容を明確にし、共通認識をもって系統性のある連携につなげることを意識し、準備・計画を進め実施した。また、協議内容については学校の目標、教員の思いに沿い、かつ学校課題の解決に資する内容とするために、事前に当該校の担当教諭と協議を行い、内容を吟味した。特に、マトリックス作成 (A小学校第4回、B小学校第3回) においては、自校の取組の意義の理解を深めるために当該校の教員に実践内容をマトリックス表に整理・分類してもらった。また、このような作業を通して、マトリックス表の見方・考え方を体得し、連携だよりに掲載されているマトリックスを読み解く視点の理解にもつながることが考えられる。

2. 2. 3 学校連携パスポートの活用

連携での我々の取組に対する当該校の教員一人ひとりの思いや認識を把握しつつ、それを踏まえて連携内容をより充実させていく手立てとするために、堀 (2019) のOPPA論を援用した学校連携パスポートを独自に作成し、活用した (Figure 2)。OPPA (One Page Portfolio Assessment) とは、「教師のねらいとする成果を、学習者が一枚の用紙の中に学習前・中・後の履歴として記録し、その全体を学習者自身が自己評価する方法 (堀, 2019)」である。これは社会的構成主義の考え方を基にしたものであり、学習前の素朴概念を出発点として、学習過程の可視化と変容の明確化しながら、学習後には適切な科学的概念の形成を促す過程において、思考や認知過程の内化・内省・外化を通して、自己評価の能力及びメタ認知の能力を高めることもねらいとしている (堀, 2019)。

Table 1 連携協議会の内容

回	時期及び内容：A小学校	時期及び内容：B小学校
1	9/14：連携の活動方針について説明及び協議	9/25：連携の活動方針について説明及び協議
2	10/23：これまでの連携だよりの説明及び協議	10/20：これまでの連携だよりの説明及び協議
3	11/ 6：A小実践内容の意義について確認	10/23：B小版キャリアマトリックス作成及び協議
4	11/13：A小版キャリアマトリックス作成及び協議	11/ 6：これまでの活動についての振り返り

このような手立ては、PDCAサイクルのC（評価）、A（維持・改善）を実行するための手立てとして有効であるとともに、Korthagen（2001 武田監訳 2010）の提唱する学習者自身のニーズや関心、省察等と結びつきを大切にしたい学習モデルであるALACTモデルにおける学びのプロセスとも合致する手立てであると考えられる。このことから、本研究の目的である教師の自己省察を促し、教師としての学びを促進していく上でも有効な手立てであると考えられる。

学校連携パスポートの主な内容は、連携前及び連携後には学び全体を貫く本質的な問いとして「教育において最も大切なこと」と設定し、それを基としながら日々の連携の手立てや連携協議会を通して、最も大切だと思ったことや質問や疑問、要望等を学びの過程として適宜記述してもらった。こうして教員自身が自己の学びを記録する中で、自己の在り方や考え方を振り返る自己省察の機会にした。そして、こうした記録を介して教員の認識を把握するとともに我々自身も学びを深め、連携を充実させていくという双方向性のある連携を構築していくための資料とした。

学校連携パスポート

●●小学校 氏名 _____

教育において最も大切なことは何ですか？ 自由に書いてください。 【連携前】	【第1回】今日の協議で一番大切だと思ったことを書いてください。 <疑問・質問等> -----	【第2回】今日の協議で一番大切だと思ったことを書いてください。 <疑問・質問等> -----
教育において最も大切なことは何ですか？ 自由に書いてください。 【連携後】	【第4回】今日の協議で一番大切だと思ったことを書いてください。 <疑問・質問等> -----	【第3回】今日の協議で一番大切だと思ったことを書いてください。 <疑問・質問等> -----

○連携前後を比べてみて、あなたの考えは変わりましたか？変わったとしたらどのように変わりましたか？詳しく書いてください。

Figure 2 学校連携パスポート。

2. 3 連携を通じた成果の分析方法

連携を通じた成果を探るためのデータの収集にあたっては、連携協力校の教員計22名（A小学校15名、B小学校7名）の学校連携パスポートに記載されたデータを用いた。具体的には、学校連携パスポートの「連携前後での教育に対する自己の考えの変化」の部分に記載された自由記述をテキストファイル化し、テキストマイニングによるデータ分析を行った。分析にあたっては、AIテキストマイニングツールを使用し、客観性を確保しつつ、教員の自由記述の特徴や全体的な傾向を捉えられるようにした。

3 結果

3. 1 学校連携パスポートの分析結果

3. 1. 1 ワードクラウド

学校連携パスポートの「連携前後での教育に対する自己の考えの変化」の自由記述部分に記載された自己評価について、AIテキストマイニングツールによるワードクラウドを作成し分析を行った。ワードクラウドの作成にあ

たつては、テキストの中から特徴づける単語を抽出するために、Tf-Idf (Term Frequency- Inverse Document Frequency) 法によって算出された、文書中に含まれる単語の重要度を評価するスコア (Tf-Idf値) を用いた。Tf (Term Frequency) とは、文章中の単語の出現頻度のことであり、Idf (Inverse Document Frequency) とは、文章中の単語の逆文書頻度のことである。なお、分析に際して、同義語や複合語の設定や固有名詞、除外語の設定を行っている。また、本調査において複合語として重要な意味を持つ語句を、強制抽出する語として設定した。分析の結果はFigure 3に示す通りであり、スコアを基準とした各品詞上位10語のスコア値及び出現頻度はTable 2に示す通りである。特徴的 (高スコア) な語句として、名詞で「連携の手立て (38.58)」、「キャリア教育 (32.61)」、「意義付け (27.69)」など、動詞で「とらえる (2.29)」、「結び付ける (2.06)」、「映せる (1.92)」など、形容詞で「とらえやすい (7.65)」、「分かりやすい (0.99)」などであった。それぞれの語句の具体的な記述としては、「連携の手立てでキャリア教育や研修の可視化をしていただき、分かりやすかったです。」、「日々の教育活動を結び付け、意義付けしていただきました。」、「よい姿を映せるように、自分が変わらないといけない。」、「子供には社会性を育てたいという考えは同じであるが、その過程での取り組み (実践) を意義付けするなど、指導者がしっかりとしたねらいを持って、取り組んでいくことの大切さを改めて実感しました。」、「実践をマトリックス表で視覚化して分かりやすく、とらえやすく整理していただいた。」などであった。

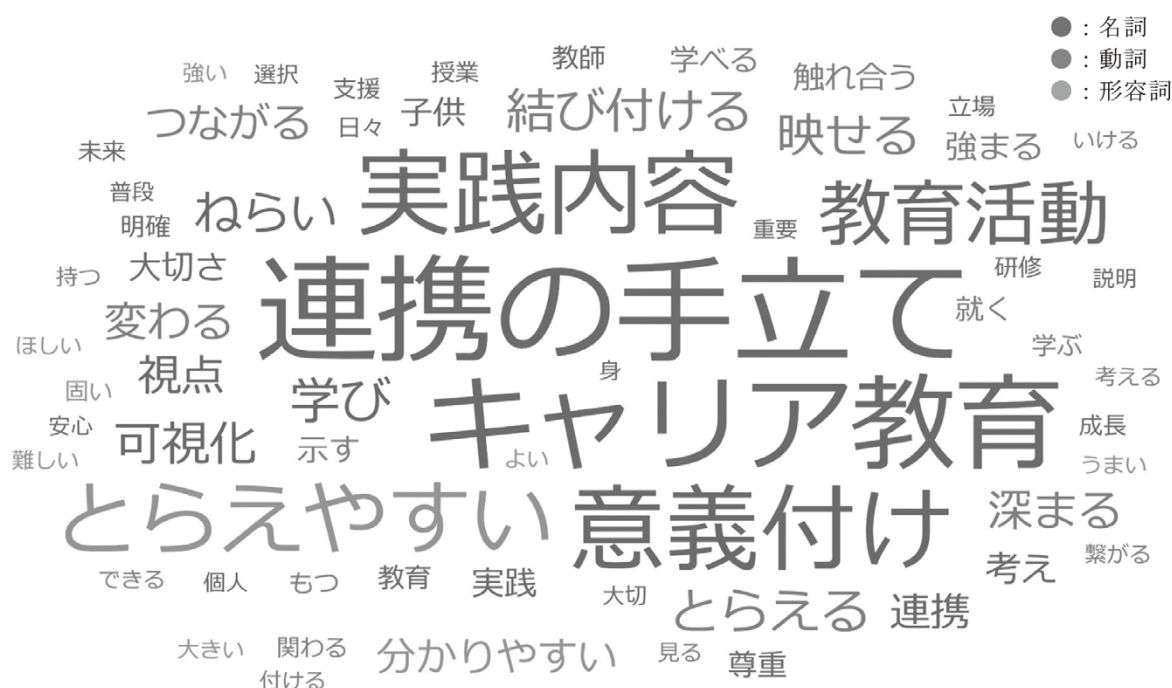


Figure 3 ワードクラウド (スコア)。

Table 2 単語出現頻度 (スコア順)

品詞 順位	語句	名詞		動詞			形容詞		
		スコア	出現頻度	語句	スコア	出現頻度	語句	スコア	出現頻度
1	連携の手立て	38.58	4	とらえる	2.29	2	とらえやすい	7.65	1
2	キャリア教育	32.61	5	結び付ける	2.06	1	分かりやすい	0.99	3
3	意義付け	27.69	3	映せる	1.92	1	固い	0.09	1
4	実践内容	27.69	3	深まる	1.20	2	強い	0.04	3
5	教育活動	17.29	2	変わる	1.15	15	大きい	0.04	2
6	学び	6.37	4	つながる	1.05	3	うまい	0.04	2
7	可視化	5.39	2	強まる	0.64	1	ほしい	0.03	3
8	ねらい	5.17	2	触れ合う	0.55	1	よい	0.02	3
9	多面的	4.14	1	示す	0.52	2	難しい	0.01	1
10	視点	3.38	6	学べる	0.41	1			

4 考察

4.1 教育活動の意義付けに伴う教師の学びの促進

テキストマイニングによるワードクラウドの結果において特徴的な語句として挙げられた「キャリア教育」、「意義付け」、「結び付ける」などの語句の記述や、共起ネットワークに描かれた各語句のまとまりである「手立ての機能」、「学びの自覚」、「教育に対する姿勢」といった共起関係から、本研究において実践してきた手立てが有効に機能し、当該校の教員個々人がキャリア教育の視点への理解を深めるとともに、当該校で実践している既存の活動の意義やねらいに対して新たな気づきを得たり、再確認したりするとともに、理解を深めていっていることが示された。また、そうした視点から日々実践している各活動のつながりを見出し、それらを意識した実践として取り組んでいくことの重要性を実感、再確認しながら、教師としての学びを深め、教育に対する視野を広げていくことにつなげていくことができたものと考えられる。さらに、「皆さんと研修できたことで私たちの学びは深まったと思います。」や「熱意をつねにもち、ねらいに向かって子供と共に学んでいくこと、それが未来につながると信じてやっていくことが大切だと再確認しました。」、「今回の連携を通して、さらに自分の考えが確かなものになった。」などの記述が見られたことから、そうした学びの深まりが教員個々人の自己の教育に対する思いやビジョンについての理解や自覚を深め、その意義をより明確にすることにつなげることができたことにより、教員自身の教育観に対する自信にもつなげていったことが示された。

他方で、「今までは言葉ではうまく説明できなかった部分が、キャリア教育の視点で見ることによって、自分なりに人に説明できるようになったというか。」といった記述がみられた。教師の学びについて、Korthagen (2001 武田監訳 2010) はニーズや関心などに基づいた感覚的な認識としての一般的な学びである「ゲシュタルト段階」、形成されたゲシュタルトについて省察し説明しようとする「スキーマ段階」、スキーマの理論を確立し理論的な議論を進められる「理論段階」の3段階モデルを提唱している。このことを踏まえると、教員の多くはキャリア教育の視点や活動の意義、ねらいの重要性を実感、理解するといった「ゲシュタルト段階」から「スキーマ段階」へ移行していったものと考えられるが、教員の中には今まで自分の抱えてきた教育に対する信念及び自己の教育観を再整理し、意義付けする過程を通して自分なりの理論的視点を構築していく「理論段階」に達し始めている者もいることが示唆される。

こうした成果は、キャリア教育の視点を活かす手立てとして本連携において定期的に発行してきた連携だよりや連携協議会、連携パスポートが、猪熊 (2007) が指摘するような評価の段階 (C) や改善の段階 (A) で重要となる客観的なデータの積み上げや評価方法となり、しっかりと成果を確認できるものとして十分に機能し、教員自身が自己の教育実践を振り返り、実践内容の意義や理論的意味を再発見、再確認、再整理する機会となったことによるものと考えられる。あわせて、本研究において系統性のある取組とするために行ってきた連携協議会や連携パスポートの活用が、学びの深まりと自覚をもたらす上で重要となる学習者と教育者が双方向性を持った働きかけを通じた思考や認知過程の内化、内省、外化を適切に機能させること (堀, 2019) につながり、そうした学習環境を構築できたことにより教員個々人が教師としての学びを深め、自己の成長を実感することにつながっていったものと考えられる。

他方で、こうした学びを支える重要な要因の1つとして、当該校の教員一人ひとりが本研究を肯定的に捉え、各取組をポジティブに実践してくれたことが挙げられる。こうした教員の態勢が整ったのは、研究者が学校現場の実践知が構成される場に密着し、教師と共に研究を遂行できたこと (永井他, 2007)、学問知よりも学校および教員自身のニーズや関心、省察等と結びついた実践知を発達させることを目指したこと (Korthagen, 2001 武田監訳 2010) に依るものと考えられるが、それと同時に調査当初の教員の教育に対する思いの記述内容や、連携協議会への参加の様子、連携パスポートに書かれた記述内容から、教育の専門家である教師としての教育に対する熱い思いを当該校の教員それぞれが備えていたことを窺い知ることができ、それが本研究の成果の基盤となっていたと考えられる。

4.2 本研究の成果と今後の課題

本研究では、調査協力校の教育目標や教員の思いを大切にして、キャリア教育の視点を活かした活動の意義付けをしていくことにより、教員個々人の自己省察を促し、教師としての学びを促進することを主眼に置いた。その結果、当該校の教員個々人に新たな気づきや、学びの深まりの自覚や自信をもたらすことができた。これらは、連携だよりや連携協議会、連携パスポートを活用し、教員の省察する場と機会を意図的に設定することができたことによるものと考えられる。また、本研究における実践が研究者と調査協力校の教員が双方向性を持ちながら実践の意義を再確認、再発見し、それぞれの思いや考えを整理することができたことにより、学びを深めていくことにつながったものと考えられる。そして、こうした学びを促進していく上で教員が深い理解を得ながら共に創造していくことが重要で

あることが示唆された。

他方で、「子供に自分の行いが映る。よい姿を映せるように、自分が変わらないといけない。」という記述があったことを踏まえると、教員それぞれが大切にしてきた思いやビジョンへの理解を深め、明確にするだけではなく、そうした自己省察を通じて獲得した自覚や自信が、自身の教育観を実現させていこうとする強い意志にもつながってきていることが窺われる。

一方、本研究の課題として次の2点が挙げられる。第1に、時間の制約が挙げられる。学校訪問の機会は、週に数回、数時間と限られた時間であった。そのため、学校での取組の見取りが断片的であり、限られた時間における意思疎通の時間を十分確保することができなかった。教師としての学びを深め、広げ、充実させていく上で、そうした取組の全体のつながりや教員一人ひとりの思いを適切に捉え、把握しながら双方性を持って情報共有及び相互認識を深めていくことは欠かすことができない。しかし、職務が多岐に渡り、多忙を極める現場の教師にとって、そうした時間を捻出することが容易ではないという実情がある。そのため、これらのことを踏まえながら情報を共有していく手立てや内容について今後検討していく必要がある。第2に、集団組織としての学びの深まりであり。今回の研究においては、教師個々の学びの促進という点で一定の成果をあげることができた。しかし、学校教育における実践は個で行うものではなく、子供たちの実態を適切に把握した上で、学校組織として系統性・計画性を持って実施されることが重要となる。そのため、教師個々の学びだけで踏みとどまるのではなく、教師集団としての組織の学びに焦点を当てていく必要があると考えられる。そのため、今後は個だけでなく組織にも焦点当てた教師の学びについて詳細に探り、検討していく必要がある。

引用文献

- 浜名 外喜男・松本 昌弘(1993). 学級における教師行動の変化が児童の学級適応に与える影響 実験社会心理学研究, 33(2), 101-110.
- 堀 哲夫(2019). 新訂一枚ポートフォリオ評価OPPA——一枚の用紙の可能性—— 東洋館出版社
- 猪熊 直樹(2007). カリキュラム・マネジメントによる学校改善に関する研究——小・中学校におけるカリキュラムの計画(P), 実施(D), 評価(C), 改善(A)の取組—— 神奈川県総合教育センター研究収録, 26, 40-45.
- Korthagen, F. (Ed.). (2001). *Linking practice and theory: the pedagogy of realistic teacher education*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- (コルトハーヘン, F. 武田 信子 (監訳)(2010). 教師教育学——理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ—— 学文社)
- 文部科学省(1999). 中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」 文部科学省
- 文部科学省(2011). 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」 文部科学省
- 文部科学省(2017). 小学校学習指導要領解説総則編(平成29年度告示)
- 文部科学省(2018). 我が国の教員の現状と課題——TALIS 2018結果より—— TALIS (OECD国際教員指導環境調査): 文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/Others/1349189.htm (2021年1月20日)
- 永井 正洋・庄司 三喜夫・望月 俊男・加藤 浩(2007). 実践的研究の方法に関する小中学校教師の認識 日本教育工学会論文誌, 31(2), 175-185.
- 新潟県立教育センター(2011). 新潟っ子をはぐくむキャリア教育のすすめ 新潟県キャリア教育ステーション
<https://www.nipec.nein.ed.jp/sc/careerstation/index.html> (2021年1月20日)
- 大田区立矢口中学校(2019). 学びに向かう力を高めるキャリア教育——教科指導・進路指導を通して—— 研究発表集
- 田村 学(編集)(2017). カリキュラム・マネジメント入門—深い学びの授業デザイン。学びをつなぐ7つのミッション— 東洋館出版社
- 田村 知子(2014). カリキュラムマネジメント——学力向上へのアクションプラン—— 日本標準

A practical study to promote teacher learning through the reflection of the significance of educational activities

Kenji YOSHIMURA*, Tomoyuki YAMADA**,
Hiroki NUMATA***, Hayato TOYODA***, Satoshi KATO***,
Kazuhito FUKUTA***, Hayato IWAI***, Yasunori MIYAJIMA****

ABSTRACT

This study was designed to facilitate self-reflection by teachers and enhance their learning through the perception of daily educational practices in elementary schools from the viewpoints of career education, reevaluation, and signification. We regularly issued documents to organize observations and reevaluations and mark the significance of educational practices. We offered teachers opportunities to discuss their learning with other teachers to develop intentional self-reflection and learning opportunities. The teachers reconfirmed and rediscovered the significance of daily educational practices as an outcome of this study, which helped them organize their thoughts and feelings and thus assisted their self-reflection and learning.

Keywords : Significance, Self-reflection, Career education

* Kitakata City DAINI Junior High School ** School Education

*** Joetsu University of Education (Professional Degree Program)

**** Tubame City TUBAME NISHI Elementary School